▲旅マタギを数多く送り出し、マタギ発祥地ともいわれる根子。山間の隠れ里のような集落で、落人伝説が残る＊

支部見聞録（東北支部）
From 秋田

現代に生きる マタギの里・阿仁

▲1943（昭和18）年、阿仁マタギが八幡平へクマの駆除に出かけた際の写真。左端が鈴木英雄さんの祖父、鈴木辰五郎＊

秋田県の北部に位置する北秋田市の阿仁は、狩猟を生活の糧としてきたマタギの故郷として名高い。マタギとはどんな歴史や習俗をもち、現在どのような状況にあるのだろうか。そして日本各地で獣害が増加し、狩猟の価値があらためて注目されている今、マタギのあり方が私たちに示唆するものとは――。奥深い山と森の地、阿仁を訪れた。

阿仁がマタギの故郷と呼ばれる理由

角館から田沢湖の西を抜けて北上していくと、やがて国道105号線は深い山伝いとなり、角館と鷹巣を結ぶ秋田内陸縦断鉄道は5,697mにも及ぶ十二段トンネルへと入る。ようやく山塊を抜けた先が、マタギの里といわれる阿仁だ。奥羽山脈に連なる森吉山や出羽山地に抱かれて、阿仁川沿いにゆったりと平地が広がり、マタギの拠点である根子（ねっこ）・比立内（ひたちない）・打当（うっとう）の3集落がたたずむ。

マタギとは、秋田を中心とした主に北東北で、鳥獣を狩る優れたノウハウと技術をもち、狩猟を生活の一部としてきた人たちのこと。山神への信仰や里の言葉とは異なる山詞（やまことば）や、シカリと呼ばれるリーダーを頂点とする狩猟組織、厳しい掟など、独特の習俗をもっていた。今では猟を禁じられているアオジシ（カモシカ）やバンドリ（ムササビ）を含め、テンやウサギ、ヤマドリなど対象は多岐に及んだが、なかでもクマはマタギにとって特別のもの。万能薬とされるクマの膽（い）（胆嚢）はもちろん血液や骨、肝臓などさまざまな部位が薬の材料とされ、肉は食用に、毛皮も衣服や敷物などに用いられた。クマの膽は藩政時代には阿仁から秋田藩に納められていたという。

マタギは阿仁だけに特有のものではない。それなのに阿仁がとりわけ名高く、マタギの故郷といわれるのは、「組織的に行うクマの巻狩を筆頭に狩猟の技術が高く、各地にその技術を伝えたからでしょう」とマタギに詳しい北秋田市商工観光課副主幹、小松武志さんはいう。阿仁のマタギたちは時に山伝いに遠く遠征して獲物をとることもあり、旅マタギと呼ばれた。信越国境にある秋山郷など、阿仁から来たマタギが婿に入ったり定住した地もある。この旅マタギは、特に毛皮の金銭価値が高まった明治半ばから第二次大戦の頃までたいへん盛んになり、職業化もした。交通機関も使って北陸や関東、中部、北海道や樺太にまで、阿仁マタギの足跡は刻まれている。

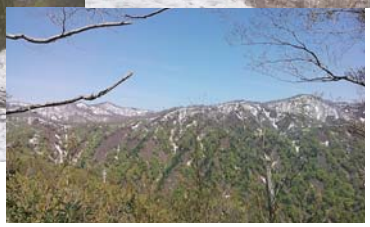
山の暮らしの一環としてのマタギ

時代は変わり、阿仁でもマタギといえる人々は少なくなった。「今でもマタギは毛皮を着て笠をかぶっていると思っている人がいるので、いつもこの格好で話をしている」。

阿仁の打当にあるマタギ資料館で、猟友会のベストを着て出迎えてくれたのは鈴木英雄さん。シカリを輩出してきた家の

▲鈴木英雄さん所蔵のクマの膽を圧し乾かす道具とクマの膽

協力／北秋田市商工観光課、マタギの里観光開発株式会社（打当温泉マタギの湯）　写真／★‥マタギ資料館展示　＊‥北秋田市商工観光課提供



▲伝統に則った巻狩は大山神参拝で始まる＊
▶猟場は天狗ノ又沢。稜線近くで撃ち手が待つ＊

▲クマを追い始める前に人員配置をチェック＊
◀堅雪を踏みしめて猟場へと移動する＊

▲勢子が谷筋近くに陣取り、追い上げルートを確認＊
◀授かったクマにケボカイの儀式をする。山中なので略式だ＊

生まれで、鈴木さんでマタギは9代目だ。「打当温泉マタギの湯」で「マタギ学校」の語り役も務めている。

「マタギは生活の一部。職業でも年中猟をしているわけでもなくて、田植え・稲刈り、山菜採りや茸採りと同じように、1年のサイクルの中にマタギもある」。

祖父がシカリで、物心ついた時からクマを家の前で解体する風景を見てきた鈴木さんは、ある程度の年齢になるとごく自然に狩りに参加した。世襲というわけでも、住人のすべてがマタギになるわけでもないが、かつては春グマの巻狩には、クマを追い上げる勢子（セコ）などとして住民を挙げて参加した。授かった獲物は“マタギ勘定”といって参加者で平等に分ける。クマの膽や毛皮は参加者で入札し、その代金すら分配するのだという。その習わしは今も変わらない。

マタギ文化や習俗を継承するために

槍から火縄銃へ、さらに村田銃を経て現在のライフルへ。道具も装束も、山村を取り囲む社会情勢も大きく変遷した。廃れてしまったマタギの習俗は数多いが、確実に継承されているものもある。春グマの巻狩が行われるのは主に4月下旬から5月の上旬。一方、県が定める一般猟期は11月15日から翌2月15日まで。春グマの巻狩は一般猟期の外だが、「県では昔から重要性を認識していて、生息調査と合わせた個体数調整捕獲として続けられてきました」と小松さんは語る。

この時季、ブナの森は見通しがよく、雌雄や大きさを選別しやすい。残雪は固く締まって夏には藪が生い茂る場所でも自在に渡っていける。巻狩では地形に合わせて複数のマチッパ（撃ち手）とシカリが兼ねることが多い指示役の“ムカイマッテ”を配置し、勢子がマチッパのいる方へとクマを追い立てていくのが伝来の手法だ。解体の際の“ケボカイ”や“カワダチ”、山の神に獲物を捧げる“モチグシ”といったマタギ独自の儀式は近年行われなくなってきたが、「覚えている人がいるうちにと、最近では伝統狩猟保存継承事業としての巻狩で儀式を復活させています」。

マタギの存在が現代に果たす役割とは

とはいえ、形式をいくら残しても実際の猟が残らなければ意味がない。実猟を続けつつ、他とは違うマタギの独自性をどう残していくのかが今、問われている。猟が暮らしの一環として行われてきた阿仁では、それはとりもなおさず山の生活のあり方や狩猟を支える山の知識、技術を残すことだと小松さんは語る。

「ベースにあるのは、山の恵みに対する感謝です。山の神への信仰の形をとってきたこのアニミズム的な思いは、阿仁には根強く存在しますし、これからも残っていくと思いますね」。

そう言われて、マタギの鈴木さんが会話のなかでごく自然に、「クマを授かる」という言い方をしていたことに思い当たった。阿仁では、獲物は山の神からの授かりものなのだ。

今、全国でシカやイノシシなどによる森林や農地への被害が増え、狩猟への関心が高まっている。同時にただ単に害獣を駆除して終わりではなく、命をいただくのだから、もったいないから食べようという論調や動きも目立ってきた。こうした時代に、生活と伝統に裏打ちされた狩猟が現在も行われている阿仁の存在がもつ意味、果たせる役割は大きい。

「阿仁は狩猟のあり方や人と動物や自然との関わりを知るにも考えるにもいい場所ですし、一地方のことに留めず、全国に発信できればと思います。どう伝えていけるかが課題ですね」。

▲村田銃の時代には囲炉裏で散弾を自作した。写真はその道具類★
◀鈴木英雄さん。持っているのはナガサという年代ものの山刀★
▶再現した昔のマタギ装束。山を動きまわるため意外に軽装だ★

▲マタギの由来を記した『山立根本巻』★

◀山の神は嫉妬深く醜い女神で自分より醜いものを見ると喜ぶといい、かつてマタギは乾燥させたオコゼを猟に持参した★

別冊 FROMはウェブサイトへ

eふぁみり もあわせてご覧ください！
http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/
「山の恵みにあふれたマタギの食」をご紹介